



明治維新から七十二年後と言えば、一九四〇年。太平洋戦争開戦が間近に迫った時期である。現在、それと同じ歳月が、先の戦争の敗戦から経過した。しかし「敗戦のトラウマ」はいまなお、日本人に共有されている。

その「敗戦のトラウマ」は決して単純なものでも一枚岩のものでもない。戦先の戦争にヒロイックな「英雄」を見出そうとする「美しい国の記憶」。戦争被害者としての思いを強く抱く「悲劇の国の記憶」。そして、東アジア諸国に対する「加害者」の側面に着目する「やましい国の記憶」。これらがいに絡み合いながら、今日の戦争の記憶が形作られているのか。本書は、この点について精緻に考察している。

ここに本書が意義深いのは、国際比較の視点である。フランスでは、「レジスタンスの勇士」「ナチ占領下の民」はいかにして現在に至ったのか。本書は七十余年にわたる「長い戦後」について冷静な思考に誘う良書である。

（評者）福間良明＝立命館大教授

明治維新から七十二年後と言えば、一九四〇年。太平洋戦争開戦が間近に迫った時期である。現在、それと同じ歳月が、先の戦争の敗戦から経過した。しかし「敗戦のトラウマ」はいまなお、日本人に共有されている。

その「敗戦のトラウマ」は決して単純なものでも一枚岩のものでもない。戦先の戦争にヒロイックな「英雄」を見出そうとする「美しい国の記憶」。戦争被害者としての思いを強く抱く「悲劇の国の記憶」。そして、東アジア諸国に対する「加害者」の側面に着目する「やましい国の記憶」。これらがいに絡み合いながら、今日の戦争の記憶が形作られているのか。本書は、この点について精緻に考察している。

橋本 明子 著

(山岡由美訳、みすず書房・3888円)

日本の長い戦後

加害と被害 絡み合う記憶

間人」「ヴィシー政権下の協力者」の語りが混在している。ドイツの場合、政府の公式政策では「謝罪」「悔恨」が前面に出されている。だが、一般の人々の間では、加害者、被害者、傍観者など、様々な物語が存在しているといふ。多様で複雑な戦争体験や戦後体験を考えれば、それも当然だろう。

それにも、ドイツ政府の公式見解と日本政府のそれは、なぜ、かくも大きく異なるのか。著者は、地政学的な要因を指摘する。冷戦構造下の西ドイツが経済的・政治的に生き残るために、NATOへの参加や欧州統合への協力が不可欠であり、必然的に欧州諸国との和解は最重要課題であった。それに對し、日本の隣国の中、北朝鮮、ソ連は共産主義体制下にあった。親米資本主義を選び取つた日本にとって、それらの国々は「和解してはならない相手」であった。

幾重にも捻れた現代日本の「戦争の語り」は、その延長上にある。「敗戦のトラウマ」の起点は何なのか。それはいかにして現在に至ったのか。本書は七十余年にわたる「長い戦後」について冷静な思考に誘う良書である。

「天皇機関説」事件

国家意識の明確化を狙う

一九二五年（昭和十年）に起きたのが天皇機関説事件である。この事件は國体明徴運動とともに、日本が戦争に突き進む大きな契機をなした事件として人々に記憶されている。本書は事件の発端と展開、そしてその後の影響にいたる全体をよく描きだしている。事

件の背景、例えば統帥権の干犯をめぐる軍部と政府の対立、政府を擁護した憲法学者・美濃部達吉の言動も取り出されており、事件の結果として、この国から失われたもの（立憲主義的なもののさざなる制限、政府や軍の方針を批判する言論の自由や報道の自由の抑圧）にも及んでいる。

天皇機関説事件は大日本帝国憲法についての美濃部の学説「天皇機関説」を排撃した事件である。軍人出身の貴族院議員・菊池武夫男爵が貴族院での学説を批判したことから始まり、美

濃部の「一身上の弁明」などを最後は学説の禁止処分で終わる。美濃部の学説は、大日本帝国的なる統治ではないとした。それが天皇機関の代表として天皇が統治するものであり、天皇の統治を位置づけ、合理的に解釈したものだった。当事者の昭和天皇もこれをね妥当な解釈と認めていた。

山崎 雅弘 著

(集英社新書・821円)

もう1冊 成田龍一著『戦後史入門』（河出文庫）。占領、55年体制、高度経済成長から戦後70年までを、繩の視点も含めて解説した入門書。

もう1冊

成田龍一著『戦後史入門』（河出文庫）。占領、55年体制、高度経済成長から戦後70年までを、繩の視点も含めて解説した入門書。



やまとき・まさひろ 戦史研究家。著書『日本会議—戦前回帰への情念』など。

山崎 雅弘 著

(集英社新書・821円)

もう1冊 佐々木惣一著『立憲』（講談社学術文庫）。東部、西の佐々木と併称された書

立憲』（講談社学術文庫）。東部、西の佐々木と併称された書